
縛——BAKU——

桶明日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縛——BAKU——

【Nコード】

N1760Y

【作者名】

桶明日

【あらすじ】

和風ホラーの小説ですが、ホラーというよりはファンタジックになるように心がけております。
楽しんで頂ければ幸いです。

注・FC2でも連載中です。

始まりの始まり

そのモノは退屈していた。民家の屋根の上に腰掛け、足をぶらぶらさせて眼下を眺め回す。見渡す景色は仄暗くて侘びしい。先程、真昼を過ぎたと思ったら、もう薄墨をぼやかしたような視界が広がっている。それほどまでに冬の時間の進みは早い。おまけに、ひっきりなりに木枯らしが吹くものだから、寒がって誰も外に出たがらないからだろう。通りを歩む人は少ない。たまに誰かが現れても、身を震わせてすぐにどこかに消え去ってしまう。全く、面白くない。閑散とした薄墨の景色の中で、そのモノの銀の髪だけが、輝いていた。

そのモノは、今度は背後に広がる森林に目を向けた。彼の鮮血のような激しい赤の瞳に、枯葉を着た木々や、この寒さでも青々としている木々が投影される。ここ最近——そのモノにとっては、数十年・数百年の単位なんて『最近』という感覚しかないのである——自然が減ってきていたが、今彼がいる場所はまだ森が沢山あった。むしろ、山の中になんとかして町を築いたといつて等しい。こうしてただ座っているだけでも、大自然の精霊の息吹が聞こえる。古き時代より存在している、大いなる力がまだこの地では生き続けている。そのモノはすぐにこの場所が気に入った。暫く居座ろうと思った。

「それにしても退屈だな……」

そのモノは、ぼやいた。

長すぎる歳月は、そのモノを飽きさせるのに充分なもので。

だから彼はいつも遊びを探していた。遊びの対象は主に人間だ。確かにそのモノは人間が自然を蹂躪する様を見るのはあまり好きではなかったが、人間自体が嫌いというわけでもなかった。彼等はいつもこちらを愉しませてくれる。想像もしていなかった行動をとり、こちらの裏を搔いてくる。時に策を弄し、時に頭を悩ませ、時に涙

し、怒り……それはそのモノの徒然に花を添えてくれた。

そのモノは、くつくつと喉を鳴らす。

「よし遊ぼう」

そう決めた。決めると同時に、心が浮き立ってくる。

さて、どんな遊びをしようか。

子供のように無邪気な、それでいて残酷な愉悦ゆえつに満ちた笑みを馳せ、そのモノは屋根の上に立ち上がる。屋根の下には、ちょうど一人の女性が買い物袋を下げて歩いているところだったが、彼女がそのモノに気付くことはなかった。そのモノは人間の目が捉えることのできない存在だった。

そのモノは千里眼で町を物色し、最適な玩具を探す。やがて、にいつと口許を歪ませた。

「あれに決めた」

眩くなりそのモノの姿は宙に消える。まるで最初から何もなかったかのように。

ただ冬の冷たい風だけが、そこに吹いていた。

これはこの物語が始まる、五日前のことである。

誰かが泣いている。

大翔——坂田大翔はそれに気付いた。

その啜り泣きは白い闇をぬって、大翔の耳に滑り込み鼓膜を震わせる。それは彼が今まで聞いたどの泣き声よりも、切実に迫り来るものがあつた。

どこから聞こえてくるのだろう、と彼は首を巡らせる。けれども、辺りは一面の白で、それ以外は何もない。

ここはどこなのだろう？

大翔は考え倦^{あぐ}ねていた。無限に続く白はどこまでも優しく、彼を囲んでいる。足下に広がる白も頭上に広がる白も、一点の染みもなく、そのために果てが近いのか遠いのか判然としなかった。立っていても踏みしめる地が存在しないのだから、まるで浮いているような錯覚を覚える。いや、もしかしたら本当に浮いているのかもしれない。

心を揺らす慟哭^{どうこく}はまだ続いていた。

——……独り。私はずっとここに、ただ、独り

その泣き声は、決して言葉を象^{かたど}ってはいなかったのだけれど、何故か大翔にはそう訴えているように聞こえた。

だから返した。

——どうして？ 何で独りだと思うんだ？

しかしその彼の声は、しっかりとした音声となることはない。彼は言葉の発し方を忘れてしまっていた。

だから、啜り泣きの主^{ぬし}は彼の声を捕らえない。だから泣き続けるのだ。

——私は寂しい、寂しい……！

泣き声の高まりと共に、白い闇が振動した。大翔は驚いて目を瞬^{しばた}かせる。もしかしたら、この白い闇は、泣き声の主の心を反映させ

ているのかもしれない。彼は意味もなくそう思った。だから、ここはこんなにも真っ白でひたすら寂しいのだと。

——お願い、誰か私を見つけて……

祈るような、絞り出すような泣き声は、するすると大翔の胸内に容易く入り込み、心を驚掴みにする。その苦痛から逃れるために、彼は今度こそはつきりとそれに応えた。

——一体、何がそんなに寂しいんだ？ 君はどこにいる？ 僕が

見つけてあげるから、だから泣くな

するとその心の声に呼応するかのように、不意に白い闇がゆっくりと裂け始める。どこもかしこも白しかないのだから、闇が動いても分かるはずもないのに、その時の大翔には分かった。白い闇がついに自分を迎え入れたのだと。

やがて、霧が晴れるようにして現れたのは一人の少女だった。四つん這いになってひたすら泣いているために、その容貌は分からない。ただ、豊かに流れ落ちる、雪原のごとき髪が目眩だった。

少女の背はひっきりなしに震えていた。まるで傷を負った子獣のように。

——私は、独り。ここにずっと独りぼっち

大翔は彼女に歩み寄る。そして驚きのままに、心の中で声をかけた。

——君は誰？

少女のか細い肩が、びくんと大きく動く。恐る恐るこちらを見上げた彼女は、そしてそのまま大きく目を見開いた。大翔より二つ三つ年下だろうか。丸みを帯びた輪郭はまだ十二、三歳に見える。

——あなたには、私が視えるの？

濡れたように光る赤い唇は、動かない。けれども大翔には彼女がそう言っているのが伝わってきた。

こちらを真っ直ぐに見つめてくるのは射干玉の双眸。そこに湛えられた闇夜に、大翔はあっと息を呑むのだ。

その底知れぬ井戸のような暗い瞳は、到底正気の間人が持ち得る

ものではない。だから彼は察してしまった。彼女は狂気のモノだと。決して関わってはならぬ存在なのだと。

この運命のような邂逅の時点で、彼はそう気付いていたのに――。

自分をひたと見据える、潤んだ二粒の宝玉に支配されてしまうのだ。

――視えるよ。だから、君は誰？ どうして泣いているんだ？

――私には名前がないの。だから泣いているの

――名前がない？

――そう、だからあなたがつけて

大翔は困ってしまっただけ顎をあげた。今まで誰かに名前をつけたことなどない。ペットすら飼ったことのない彼には、それは至難の技だった。

彼は考える。この儚い少女にはどんな名前が似合うだろうか。

まるで頼りない、この夢の中のような世界に、突如として現れた彼女を何と呼べばいいのだろうか。

――夢だ……

――え？

少女が訝しんで小首を傾げる。僅かに眉をひそめたその仕草でさえ、彼女がすると大層美しかった。

――君は綺麗な夢の住人だ。だから……『美夢』^{みむ}というのはどうかな

おずおずとそう言ってみる。こんなに優美な少女に自分が名をつけていいのだろうかという迷いと、もし気に入らなくて突き放されたらどうしようかという恐怖が、そうさせていた。

——み、む……美夢^{みむ}

少女はまるで飴を含むように、その名を暫く心の口の中で転がしていたが、やがてにこりと笑った。大輪の華が咲いたかのような、輝かしい笑顔だった。

「素敵な名前。ありがとう」

少女——美夢は初めて口で音を発した。そして鈴を振るような、澄んだ美しい声で笑う。

それと同時に、一粒の透明の雫^{しずく}が、目尻からその白い肌を滑り落ちていった。その雫は落下し、白い闇の中に溶け込む。そして雫が溶け込んだ箇所を中心として、様々な色彩が飛び出していった。

驚いて大翔^{ひろと}は周囲を見渡す。目が追いつかないほどの速度で、鮮やかな色は世界を埋め尽くしていく。それは色とりどりの花だった。名も知らぬ花が、今まで何もなかった世界に突如として息づきはじめたのだ。

「あなたの名前はなあに？」

美夢は問う。

その問いに答えてはいけない。本能はそう告げていたのだけれど。そのたゆたう白い髪が、漆黒の瞳が、艶やかな唇が、それ自体が光を発してそうな白皙^{はくせき}の肌が、それを許さない。

「僕の名前は……」

知らず、大翔の唇は震えていた。

「名前は？」

甘やかな声が、優しく大翔を抱く。

風がそよぎ、二人の間を流れていった。美夢の曖昧な灰色の着物がふわりと一つ揺れた。

もう、限界だった。

「僕の名前は翔だ」

答えた瞬間、ふと楽になる。今まで自分についていた錘^{おもり}が外れたかのような感覚。けれどもその瞬間、代わりに粘り着く茨^{かぜ}の枷^はを嵌められたことを、彼はまだ知らない。いや、本当は気付いていたのかもしれないけれど、もしかしたら敢えてそれを無視しようとしたのかもしれない。

それほどまでに、美しい夢の前に立つのは心地よかった。

「そう、宜しくね、大翔。大好きよ」

彼女の折れそうな喉から自分の名がこぼれ落ちた瞬間、不思議と大翔は深い安堵を覚えた。

そして彼は縛された。

* *

不意に世界を引き裂くベルの音が響き渡り、大翔ははっと目が覚めた。

二、三度瞬きして周囲を認識する。目に入ってくるのは見慣れた薄汚れた壁と、床に散乱した漫画や教科書の山。あの美しい少女も、一面の花畑もどこにもない。

「夢、か」

それにしてはなんと鮮^{あざ}らかな夢。

夢から覚めたことを心から残念に思いながら、大翔は無粋な目覚まし時計を黙らせた。そして気怠げに伸びをし、まだ覚めやらぬ頭のまま、ゆっくりと立ち上がった。カーテンを開け放つと、朝の優しい光が差し込んでくる。彼は頭を振った。

何故だろう、いつもは清々（すがすが）しく感じるはずのこの光が、今日は鬱陶しくてしょうがない。

憂鬱な一日が今日も始まろうとしていた。

外の冷たい朝の空気が、容赦なく大翔の肌を突き刺していく。その中にいるのは辛く、大翔はたまらず襟と袖をひっぱり、できるだけ肌の露出面積を減らした。

頭がガンガンと痛い。大翔は基本的に寝覚めが悪い質だが、今日は常にも増して悪かった。あんなにも綺麗な夢を見てしまったせいかもしれない。まだその緩やかな空気を引きずっているように、体がとても重い。

――二度寝できれば良かったのに

大翔はそう思った。しかし時間というのは非情なもので、それは不可能だった。二度寝してしまったら、確実に学校に間に合わない。

坂田大翔十五歳、現在中学三年生。中高一貫校であるために、受験戦争とは程遠い位置にいたが、それでも風邪でもないのに学校を休むのは気が引けた。それも『二度寝』したかったから、という実に我が儘な理由で。

彼はそんな真面目で融通の利かない、かつ気弱な少年だった。

「ねむ……」

口が全部顔を飲み込んでしまうのでは、というぐらいに大きな欠伸をする。途端に冷たい空気が容赦なく肺に入ってきて、大翔は噎せた。

びゅうと一つ吹いた木枯らしが、大翔の猫毛な髪を弄んでいく。彼は全身に走った痺れるような寒さを振り払うように、体を震わせた。この寒さの中にあっても、一向に退散してくれそうにない酷い眠気のせいで、重く垂れ下がっていた一重の瞼が、更に強く閉じられた。

寒いのは苦手だ。暑いのもずっとずっと苦手だ。

彼の白い頬は、今は寒さのために赤く焼けていた。

まるで女のように滑らかな肌と、ほっそりとした体を持つ彼が、

薄暗い朝を一人とぼとぼ歩いているさまは、どことなく頼りない。そして同世代の女の子の間からは、好意的な噂話にあがるほど、繊細で綺麗な容姿は、しかし本人にとってはコンプレックス以外のなんでもなかった。

——もうちょつと、筋肉でも脂肪でもあれば、こんなに寒く感じないのかもしれないのに
埒もなくそんなことを考える。

自分の体型が嫌で仕方なくて、一時期、筋力トレーニングに励んでいたこともある。しかし慣れないことをしたせいで、かえって体調を崩して寝込んでしまい、ますます痩せ細ってしまった。

その時のことを思い出して、大翔は溜息を吐く。吐かれた息が、くるくると舞い上がり、宙に溶け込んで消えた。

だが、大翔のその鬱々とした思考は、そこで中断された。

「ドロップ・キック！」

張り上げられた馬鹿でかい声と共に、重たい衝撃が背中に落ちてきたのだ。大翔はそのまま舗装されている道を外れて、地面に倒れこむ。コンクリートに覆われていない土に生えた霜柱が、冷たく肌を突き刺し、彼は思わず「うわっ」と悲鳴をあげた。

「朝っぱらから、元気がないぞう！」

声のする方を恨めしげに振り返れば、制服姿の少女が腰に手を当てて、仁王立ちしている。

そのストレートの長髪は、まだ満足な日差しもない中でも、はっきりと茶色と分かる色彩を帯びていた。現時点でこれなのだから、昼間はずっと明るく光を弾いているのだろう。でも、彼女の髪が生まれつき色素が薄いわけではないということを、大翔は知っている。おまけに、肩を超える長さの髪は結ばなければならないはずなのに、そのまま無造作に垂らされていた。もう、髪だけでも二重に校則違反だ。

けれど、彼女のそんな型破りな——と、大翔はそう思っていた——格好は、それには留まらない。大翔の視線の先には、彼女の白く

細い脚が、にゅっと突き出ているのである。それが見えるのは『コートの前ボタンは留める』、『スカートは膝上5センチより長くなくてはならない』という二つの規則を守っていないからだ。

寒くないのだろうか、とその長い二本をまじまじと眺めていると、今度は頭を鞆で殴られた。

「ぐえっ」

蛙のような不細工な鳴き声を出した大翔の上から、少女は甲高いかんだか声を浴びせた。

「もう、何見てるのよ、エッチ！」

そんなに見られるのが嫌なのなら、そんなファッションをやめればいいものを。

矛盾だらけの女心を理解するのは、大翔には到底無理そうだった。
「茜ちゃん、茜ちゃん、それぐらいにしときなよ。ただでさえ、いつも呆けてるような大翔が、あんまり叩くと、呆けるを通り越して気を失っちゃうよ」

殴る蹴るの暴行を加えてきた、実に雄々しい女——鹿波茜かなみの背後から、硬質な黒髪の少年が姿を現す。その目鼻立ちのはっきりした顔を認めて、大翔はほっと胸を撫で下ろした。

「でもお、水本先輩、こいつ、朝からへたれ過ぎなんですもん」

「お前が朝から元氣よすぎなの。……涼汰りょうた、おはよ」

大翔は茜に文句を言って、制服についた土を払いながら、ゆっくりと立ち上がる。

その間に近くまで寄ってきた涼汰りょうたこと水本涼汰みずもとは、「ういっす」と片手を挙げて笑った。

「しかし、相変わらずお前ら二人仲いいのな」

涼汰はにやにやと薄気味悪い笑みを馳せる。大翔ひろとは半ばうんざりとして返した。

「違うって、そんなんじゃないよ」

大翔あかねと茜は家が近くで、幼い頃から一緒に育った。家族の交流もあったし、しょっちゅう家を行き来していたので兄妹きょうだいみたいなものなのだ。

実は大翔の方が茜より一つ年上なのだが、あまりにも近くにいたせいで、茜はいつもぞんざいな態度をとってくる。そう、たった今のように。

もっとも、大翔が嫌なことは嫌だとはっきり言えない軟弱な性格の持ち主だったので、彼にもその責任の一端はあるわけだが。

「僕と茜は幼馴染み。それ以外のなんでもないの。……な？」

余計な勘ぐりをされるのは、茜も迷惑だろうと思いい、同意を求める。茜は涼汰から妙なことを言われたのがよっぽど嫌だったのか、大翔の方を激しく睨んでいた。

腹立たいしい台詞を吐いたのは涼汰であったのに、こちらを恨まれなくても困るというものだ。全く、女という生き物は難解な上に、理不尽だ。

茜はすぐに、ぷいっと顔を背けて言い放った。

「そーです、ヒーロとはただの幼馴染みだけです。水本先輩も、変なこと言うのはやめて下さい！」

そのあまりな鋭い物言いに、涼汰は首を竦すくめる。そしてまるで哀れむような視線を大翔に投げてよこした。

気まずい沈黙が三人の間を流れる。それを破ってくれたのは涼汰

だった。

「今日は随分と眠そうだな」

「え、ああ、まあ」

唐突だったせいで、自分が話しかけられていることに気付かず、一瞬遅れで大翔は曖昧な返事をする。

「ヒーロはいつだって眠そうじゃないですかあ」

茜は意地悪く言った。涼汰は苦笑した。

「いや、まあそうだけど。何か今日は一段と眠そうというか、ぼーっとしてるというか」

「うーん、なんか夢見が悪くってさ」

「嫌な夢でも見た？」

「いや、いい夢だった、と思うんだけど……」

目を閉じれば、ふう、とまざまざしく浮かんでくるのは白の情景。気を緩めれば、容易く引き込まれてしまいそうになるほど仄暗い圧迫感と、それに相反する優しい包容力とをあの世界は同時に孕^{はら}んでいた。まるで優しい呪^{のろ}いのように。

「なんだそら。わけわかんねー」

涼汰は手を頭の後ろで組んで、一蹴した。

「そうだよな、わけわかんないよな」

大翔も苦笑いをして、頭を振って夢の幻を追い払う。

その後はいつものように三人で、下らない冗談を言い合ったり、からかい合ったりしながら、学校への道を歩いた。

大翔が住んでいるところは比較的田舎であり、規模は大きくはないが田園が広がっている。初夏の前になれば、水が張られ青い稲が植えられる所も、今は枯れ草に覆われていて寒々しい。

更に田園を通り過ぎると、民家が建ち並ぶ通りが出る。背の高いビル等はなく、小さな庭を持つ家々が、碁盤の目のように整列されていた。そのため、初めてここに来た者はどこもかしこも同じ景色のために、迷うのが常だ。

けれど、通い慣れている大翔達は迷うことなく進んでいく。いつ

ものように、何度も見てきた家の前を通り過ぎ、罅割れたコンクリートの上を歩いていく。

普段通りすぎるほど普段通りで、平凡な日常。ずっと繰り返してきた退屈な日々を、今日もまた繰り返す。

確かにそのはずだった。

それなのに、何故だろう。

大翔は、ふと足を止めた。

数歩先では、涼汰と茜が何事かを話しながら、そして笑い合いながら進んでいる。大翔と彼等との距離は三步と離れていないのに、どういうわけかそれがとても遠い気がした。

なにか、自分と自分でない世界が薄い膜で隔たれているような。いやそれだけではなく、この自分の体でさえも、まるで自分のものでないかのような、意識だけが遠く離れたところにあるかのような心持ちがする。現実感というものが薄い。

突然、鈴を振るような可憐な笑い声が響いた。大翔は驚きのあまり一瞬、息を止める。世界が自分から遠ざかったような錯覚に陥った。

「ヒーロ、どうしたの？」

我に返ると、二人がこちらの方を怪訝そうにみていた。

どうやら先程の笑い声は、茜あかねのものだったらしい。いくら考え事をしていたからといって、誰かの不意の声にびっくりするなんて、どうかしている。

「あ、いや、何でもない」

大翔ひろとは無理に笑顔を繕って、彼等に追いつく。小走りに走ると、スニーカーが寒さに固まった地面を打って、トントンと硬い音をたてた。

「いくら眠いからって、お前はぼーっとしすぎ」

「どうせ、夜更かししてゲームでもしてたんでしょ」

口々にそう言われながら、大翔はそれに適当に話を合わせた。自分のふわふわと宙を歩くような感覚を無視して。

そしてまた歩き出す。自分のいた現実には、必死に溶け込もうとしながら。

機械さながらに。ただ、歩いた。

* * *

「ほら、茜ちゃんの勘違いだっただろ」

一足先に校舎に入っていく大翔の後ろ姿を靴箱で見送りながら、涼汰りょうたは隣の少女に話しかけた。

少女は心許なさそうな表情で、食い入るように大翔を見つめている。一方、見つめられている方は、その熱心な眼差しに少しも気付いたふうはなく、のんびりとした足取りで廊下を歩んでいた。

「そっか」

廊下の曲がり角で大翔の姿が消えると、茜は視線を外して、それ

までの自分を恥じて笑った。

周囲は朝の挨拶を交わす生徒で、ごった返している。みんなが一声に下駄箱を開け閉めするせいだろう、この時間帯はいつにも増して、ある種独特の臭気が、人が歩く風に乗って漂っていた。

「そんな見間違いするなんて、茜ちゃんよっぽど、大翔のこと好きなのな」

涼汰が軽口をたたくと、彼女は目を見開いて、頬に朱を散らせた。その分かり易すぎる反応が、涼汰に微かな胸の疼きを覚えさせる。

「違いますって！ 水本先輩、何ですぐそんな方向に話持っていくたがるんですか」

ムキになって言い募ることが、どれだけ返ってこちらを傷つけていることか。そんなことも、この鈍感な少女には分かりそうにない。少女が鈍感なのは、彼女が偏に幼馴染みに想いを寄せているからだ。そしてそれに勘付かないのは、想いを寄せられている張本人、大翔ぐらいなものだろう。

「あいつ鈍いから、はっきり言わないと伝わんないぞ」

苦い思いを堪えて、そう言ってやる。すると胸ぐらを掴まれた。

「水本先輩、こんな人が多い場所ところで、そんな誤解を招きそうなこと言わなくてもいいでしょおっ？」

茜は凄みのある囁き声を立てる。胸元を引っ張っているあたり、恐らく威嚇しているつもりなのだろうが、何しろ涼汰の方が背丈があるので、彼女は無理に背伸びして見上げるといいう、なんとも可愛らしい格好になっていた。

——誤解じゃなくて事実だろうに

内心、溜息を吐く。勿論、それを表に出すことはしなかったが。「分かった、分かったから放して」

言うと同時に胸元から消えた抵抗を、少し残念に思いながらも、涼汰はわざとらしく襟をただした。

「だってさ、茜ちゃん見たんだろ？ 大翔と一緒に歩く女の子」
いつものごとく茜は、ふらふら歩いている大翔を見つけ、そして

大層、憤慨した様子で涼汰の服を引っ張ったのだった。

『ヒーロったら信じられない！ 朝っぱらからあんな可愛い子連れて歩いてるなんて』

言われるがまま、大翔の方に目をやった涼汰は、しかしそこに誰の姿も見出すことができず、困惑した。

『茜ちゃん、大丈夫？ 寝ぼけてるんじゃない？ 女の子なんていないよ』

『え、いるじゃないですか！ ……ってあれ？』

茜は目を瞬かせ、首を傾げた。不安定な足取りで歩む少年の近くには、人影どころか猫一匹すらいなかったのである。

自分の見間違いに對する恥と、見事に空振りした怒りが、共に行方を失ってしまったのだろう。先程の彼女の大翔への蹴りは、その後、すぐのことだった。蹴られた側はとんだ八つ当たりで、たまったものではなかったろうが……、まあ、きっと彼にはいい目覚ましだ。

不意に、近くでどっと笑い声が起こる。振り返ると、比較的親しくしている面子が、ちょうど入ってきたところだった。彼等は涼汰に気付くと、軽く挨拶をする。続けて、傍らに立つ茜に好奇心な目を向けた。

愛らしい容貌の——中身はともかく——茜は、学内でそれなりに顔が知られていて、学年、性別を問わず人気があるのだ。それに、彼女のことを知らなかったとしても、同学年内で見ない美少女がそこにいたら、気になるだろう。

何となく居心地の悪さを感じたのか、茜は一步下がって、涼汰の背に隠れるようにする。そして小声で囁いた。

「あ、でも実はホントに寝ぼけてただけかも」

「なんだそら」

涼汰が投げやりな返事をする、彼女は細い指を口許に宛て、形のいい顎をつんと上に向けた。

「今、思い返すと、よく分からないんですよ。髪とか服とか、すっかり見えたわけじゃなくて、何かそんな子がいた気がした？ だけな感じ？ でも、やっぱりなかったのかも？」

彼女の台詞は語尾ばかりが上がっていた。要領を得ないその内容に、涼汰は頭を掻く。

「なんだそら。茜ちゃん、もう重症だね。呆けてるのは大翔一人で充分だよ。俺、二人も面倒見きれねー」

少女は曖昧に笑う。そして、気をつけます、と戯けを含んだ声音で言い、浅く頭を下げた。そのままその場から離れる。一個下の学年の靴箱は、ここより少し東にいったところにあるのだ。

次第に小さくなっていく華奢な後ろ姿を眺めながら、涼汰は一つ大きな嘆息を漏らした。

女という生き物は、時に激しく残酷だ。あんなにも打ち解けたふうでありながら、そのくせ、その可能性なんて微塵もないことをこれでもかと思せつけてくる。

親しい友人として二人の恋を応援しているのも事実。大翔が鈍感なために、茜の想いが成就されないことを喜んでいるのも事実。

涼汰の胸内では、二つの相反する感情が闘ぎ合っていた。考えても埒もないことだ。

そう結論づけて、涼汰は校内に入ろうとした。そして、どきりとした。

視界の端に、小柄な人影のようなものが映ったのだ。

反射的にその人影に顔を向けて、そしてほんと胸をなでおろす。人影に見えたのは、誰かが靴箱に立てかけていた箒とバケツだった。「なんだよ、驚かせんなよ」

涼汰は独りで呟く。安心したと同時に、用具をきちんと片付けておかなかった誰かに対して、理不尽な怒りがこみ上げてきた。

そんな柄がらでもない癖に、涼汰は掃除用具を両手に持って校内に入る。

眉間に皺を寄せた彼が、真面目君さながらにお片づけをしている様は、周囲に違和感を抱いだかせるに充分なものであったが、彼自身は全くそのことについて気にしていなかった。いやむしろ、気付いていなかったといった方が正しいだろう。そしてその後、「水本涼汰みずもとが朝から何かやらかして、罰則を受けた」という噂いっしきが、一時の間、広まることになるのだが、そのことについても彼は全く気を回さなかった。

ただ、この日の朝の不可思議な体験だけが、その心に深く刻み込まれていた。

閉めきられた窓ガラスから、陽光が通り抜けてくる午後。エアコンが設置されていない教室でも、柔らかな光が、ぽかぽかと机や椅子やらそこら中にあるものを温めていて、過ぐすに苦しくない。

教室内では、談笑に花を咲かせていたり、携帯を弄っていたり、急いで弁当を胃に流し込んでいたり、律儀に次の授業の準備をしていたりと、生徒それぞれがまだ自由に動いていた。

そしてそんな昼休みの名残を引きずる中――、坂田大翔さかた ひろとは背筋に冷や汗を滲ませて、鞆を漁っていた。

――やばい、宿題忘れた

探せども探せども、目当てのノートかけらの欠片さえ見えない。鞆の中に入っているものを一つずつ出して机に重ね、それをまた一つずつしまうという動作を繰り返してみるが、それは徒労に終わった。これが最後と、荷物を全部出した鞆を逆さに振ってみたが、出てきたのは塵ちりだけだった。机の中を覗いてみたが、やはりない。どうやら本当に忘れてきてしまったらしい。

一気に脱力して、大翔は大きく息を吐く。

彼は基本的に真面目な少年だった。やれと言われたことはきちんとするのが主義だ。

が、同時に、頑張っても報われない少年でもあった。掃除をしてもゴミ箱をひっくり返す、買い物頼まれてメモ通りのものを買ったはずなのに一品は抜けている、そして今日は、昨日の夜に、眠い目を擦りながら片付けたはずの宿題を持ってこなかった。

まったく、冴えない。

教師がくる前に、涼汰りょうたに写させてもらおうかと、目で彼を捜して、そして肩を落とした。涼汰の姿が教室になかったのだ。どうやら午後はサボるつもりであるらしい。いつものことだ。

それに……、と大翔は考え直す。

そう、それに万が一、奇跡的に涼汰が教室にいたとしても、彼が宿題なんぞをやっているわけがない。大体、「すみません」と、少しも悪びれたふうもなく謝って終わりなのだ。勿論、褒められたことではないのだが、彼の飄々とした態度は、教師の苦笑を呼んでも怒りを買うことは滅多になく、かつ生徒達の明るい笑いを誘う。

不器用な大翔が真似できそうな芸当ではない。

別の友人に頼もうと、適当に声をかけようとしたが、運悪くそれよりも教師が教室内に入ってくる方が早かった。

「授業、始めるぞ。席につけ。……ほらそこ、いつまで喋ってるんだ。さっさと席につかんか」

壮年期の男性教師が、教科書の角で教卓を叩く。それを見ながら大翔は、心の中で今日の板書に自分が指名されないことを祈っていた。

けれどどうやら天は、ちっぽけな少年の願いなど聞き届けるつもりはないらしい。

「んー、じゃあ、坂田。今日の問題、解いてみろ」

教師が、徐に大翔の方を指したのである。

その時の大翔の絶望は言うに難くない。

こういうとき、自分が頭が良かったら、と大翔は切実に思う。もし、少しでも賢かったら、その場で解くことができるはずなのに。

大翔は真面目ではあったが、決して成績はいい方ではなかった。だから、こういうときは正直になるしかない。

彼は立ち上がると、胸を上下させる。そして意を決して口を開いた。

「すいません、持ってくるのを忘れました」

自分が想像していたよりも、ずっと小さな声が、唇から漏れる。

だが、教師は嫌がらせか、それとも本当に聞こえてないのか、眉を顰めた。

「ん、何だって？」

「えと、わ、わ、忘れました……」

先程とほぼ変わらない音量で、今度は吃^{ども}りながら言ってしまう。
最悪だ。

周囲からは、忍び笑いが沸いていた。

教師は呆^{あき}れたように、鼻から息を吐^はいた。

「まったく、どうしようもない奴だな、お前は。本当は忘れたんじやなくて、最初からやってないんじゃないのか？」

大翔はがっくりと項垂れる。本当に忘れただけなのだが、ここがない以上、弁明のしようもない。

教師の責めと攻めはまだ続く。

「まあいい、じゃあ今、解いてみる。一回、解いたならできるだろ」
それができるのなら、最初からそうしている。

まさかそう言うこともできず、大翔は仕方なしに前に進み出て、チョークを取った。そしてそのまま、固まってしまう。ややあって、少し書き始めたが、そこから思考が停止して、黒板消しで一旦消し、もう一度書き出す。けれど一向に考えが浮かばず、自分が解いた内容を思い出すこともできず、また固まってしまった。

背中には容赦ない忍び笑いが、いくつも刺さってくる。

「ああ、もういい。……井上、お前やってみろ」

教師はクラス内でも比較的、成績のよい女生徒の名前を呼んだ。
小さな鼻に乗った眼鏡が印象的なその女生徒は、小さな声で返事を
して立ち上がった。

惨めな気分のまま、大翔はチョークを置く。そして窓際の自分の
席に戻る途中で、その少女と擦れ違った。彼女の二つに結んだ長髪
が、視界の隅で揺れていた。

机の間を流れる秘やかな嘲笑と、女生徒の板書の音が耳に痛い。ここまでくると、教師はもしかして単に自分を虐めただけではなかろうかと、被害妄想までしてしまう。

椅子に腰掛けて、大翔はチョークの粉のついた指を摺り合わせる。乾燥した皮膚が気持ち悪い。

——どうしていつも自分はこうなのだろう？

大翔は苦いものを噛みしめながら、頬杖をつく。

学校に反抗的な思いを抱いているわけでもなく、やる気がないわけでもない。常に忠実に生きていくつもりなのに、全然上手くいかないのだ。この広い世の中で自分だけが能力がなくて、社会不適合者な気がする。いつもいつも自分だけが何もできないのではないかと疑ってしまう。

沢山の人間がいる世界で、自分だけが異端だ。そんな違和感に縛られて日々を生きている。

それに引き替え、涼汰は決して真面目でも誠実でもないのだが、いつも楽しそうだった。確かに、成績に関してはあまりよくはないのだが、それは大翔だって同じだし、それにサッカー部である涼汰は大層、運動ができた。レギュラーで試合の時は大活躍する彼は、女子の間でも人気があり、その気さくな人柄で友人も多かった。確かに真面目でもないしよく授業をさぼるため、教師達の悩みの種であるはずなのだが、手のかかる子は可愛いということなのだろうか、教師受けも決して悪くはないのだ。

涼汰は、大翔にないものを全部持っていた。

大翔は涼汰のことが羨ましかった。そして少しだけ——ほんの少しだけ——憎かった。

窓の外を一匹の小鳥が、真っ直ぐ横切っていく。小さな翼を震わせて、一目散に飛び去っていったあれは、雀でもあろうか。

そういえば、最近、雀を見ることが少なくなったな、と思いながら、大翔は蒼空を目を凝らして見つめる。

蒼穹は広がりを持って、遙かに続いている。その中で、綿のような雲が、形を変えながらのんびりと流れていた。

蒼と白を背景にして、再び小鳥が視界を翔ていく。

見た目はこんなにも明るい風景であるけれども、きっと外に出れば身体 of 芯まで凍ってしまいそうに寒いのだろう。現に窓の棧から微かに漏れてくる空気が、顔や手など露わになった部分を悪戯するように冷やしていく。

——寒いのは嫌い？

その時、ごく自然に胸内に滑り込んできたその声は、大翔の思考によるものではなかった。

——え……？

驚いて二、三度、瞬きしたが、それ以上の動きをすることができない。腕に足に首に力を入れてみたが、筋肉はびくりとも反応してくれなかった。

だが、大翔はそれを不思議と不気味だと思ったり、不快に感じたりはしなかった。むしろ逆に、強く優しく抱きしめられているような、そんな感覚があった。

——大翔は寒いのがあまり好きじゃないのね
くすくす、くすくす。

続いて、澄んだ笑い声が響いてくる。

大翔はひたすら目だけを動かして、声の主を捜した。

だが、声の主は姿を見せようとはしない。どうやら、驚いているこちらをからかっているらしい。

大翔は暫く、呆気に取りられて周囲を見渡していた。そしてそうしているうちに、ふと楽しくなる。

こちらをおちよくって身を潜ませている子を、何とかして見つけ

だしてやるのだと意気込むと、気分が高揚してきた。それは幼い頃していた隠れん坊を思い起こさせた。

大翔が彼女を見つけるのにそう時間はかからなかった。

いつの間にか、天空からは太い蔓が絡まったものが、Uの字に垂れ下がっていた。その蔓は最下部でより厚く広く編み込まれており、薄墨色の着物を纏った少女をそこに乗せている。

蔓でできたぶらんこを漕ぎながら、白髪はくはつの少女——美夢みむは囁く。

——嫌い、嫌い。大翔は寒いのが嫌い

長く落ちている蔓——一体、上はどこに繋がっているのだろうか——は、弛み、そして緊張し、美夢を揺らしていた。

それから不意に、揺れるぶらんこが、大翔の方に向きを変える。

最初は鋭角に動いていたぶらんこは、けれど数回、漕がれるうちに鈍角となり、次第に大翔の方に近づいてきた。

間近すれすれまで美夢がきたとき、ぶらんこは斜めに傾いたまま止まった。

——じゃあ、温かいところに行きましょうか

紅葉のような手が、目の前に差し出される。大翔は反射的にその手を取った。

「うん」

はつきりと返事をする、身体が強く引っ張られた。そしてそのまま宙に舞い上げられる。

頬を切る風と、重力から開放された身が爽快で、大翔は気の向くままに四肢を動かして、青空を泳いだ。

右手には僅かな感触がある。美夢が手を握っているのだ。しかしその手は、冷たくも熱くもない。また、たいした抵抗もなく、大翔が泳ぎ回るのが邪魔しない。気をつけていなければ、忘れてしまいうようなほど、ささやかな気配だった。

不意に、身体が落下し始める。驚いて手足をばたつかせると、そこで美夢が初めて手を強く握った。

「大丈夫」

少女は漆黒の目を細めて笑う。その幼い外見にそぐわない、慈愛に満ちた微笑みに、大翔は全身の緊張が解れていくのが自分でも分かった。大翔は瞼を閉じた。

堕ちていく。ただ、真っ直ぐに。

緩やかに、堕ちていくのだ。

ときり、と軽い音がして、我に返れば大翔は花畑の中に横たわっていた。

「ここは、今朝の……」

彼は首を巡らす。

視界を埋め尽くすのは、鮮やかな色彩の花々。花は所狭しとばかりに、一面に咲き誇っている。あるものはダイヤの花弁を開かせ、あるものは二本の花が頭で癒合し、またあるものは縁が銀に煌めいている。どれもこれも、現実世界では目にしたこともない、不可思議な形をしていた。

大きく息を吸い込めば、甘い香りに噎せてしまいそうになる。先程までいた冷えた空気が立ち込める教室とは対称的に、温かくまるで春のような陽気が漂っていた。

「大翔が温かいところに行きたいって言ったから」

まるで心を読んだかのように、透き通った声で美夢は言った。

大翔は頷いた。

「ああ、それで……」

大翔は腰を落として、指先で花の頭を挟む。花は揺れる動きを止めて、彼にその可憐な顔を向けた。鼻を近づければ強い香が鼻孔を擦る。大翔が指を開いて放すと、花はふるふると震えて、またそよ

風に同調して揺れ始めた。

大翔は今度は空を見上げる。雲一つ浮かばない青の空が、白い光を透かしている。不思議なことに、目を焼く太陽はない。

天国とはこういうところなのかもしれない。

自分が死んでいるとは思わなかったけれど、大翔はふとそう思った。

そして彼はもう一度辺りを見渡す。何度も視線を巡らせるが、花畑と空以外のものを見出すことはできなかった。

「でも、なんだか寂しいな」

負の評価が混じった台詞に、美夢は眉宇を曇らせる。

「寂しい？」

大翔は慌てて、手を振った。

「いや、いいんだ、ここはとても綺麗だから。ただ、僕と君以外誰もいなくて、花以外に何もないから、そう思っただけだから。でも、本当にいいんだ。ここにいと落ち着くし」

取り繕うように言ってみせるが、美夢は納得した様子はない。そして、困ったように首を傾げる。

「それは、大翔が私に何も教えてくれないからよ」

「え、僕が？」

「そう、大翔が。ここはあなたが作る世界。あなたが欲しいものを願わないと、何も生まれない」

意外な内容だった。大翔は、この世界は美夢が支配しているものだと、てっきりそう思っていたからだ。

彼は悩む。

眼前に立つ小柄な少女は、その澄んだ夜空の双眸でこちらをひたと見据えていた。

華やかな色彩の中に立つと、彼女の灰色の着物が、まるでそこだけ切り離されているかの如く、うっすらと浮かびあがっている。今改めて見ると、その姿は、侘びしく哀れに映った。

——もっと濃い色の服だとい

日本的な顔立ちの彼女には、やはり着物がいいだろう。でも、それが灰一色では貧相だ。穢れない純白の髪と、輝く黒曜石の瞳の彼女には、その瞳に合った黒の着物が合うかもしれない。

一旦、考え始めると、空想は止まることなく膨らんでいく。

それと、ここが花畑だけではつまらない。美夢に相応しい、大きな古めかしい日本家屋が欲しい。

その時、美夢が肩を震わせて笑いだした。その白い頬は、淡く桃に色づいている。

「美夢？」

訝しがる大翔に構わず、美夢は踵きびすを返して走り始める。

「あ、ちょっと待って！」

驚いて大翔は、その小さな後ろ姿を追った。

彼女の細い足が乗せられた赤い鼻緒の下駄が、花畑を踏みしだく度、花卉が散る。

大翔は夢中で追った。

こちらは息切れするほど走っているというのに、美夢といえば、まるで疲れを知らずに走り続けている。飛ぶように早く、軽々と駆けていく。

突然、大翔は躓つまづいて転んだ。

「いって……」

これは確かに夢のはずなのに、擦った膝がじくじくと痛みを訴えていて、妙に生々しい。

足許には、やや太めの茎の丈の長い花が群れて、笑っているかのように揺れていた。どうやら、悪戯してきたのはこの花達らしい。

「ちつくしょー」

まさか花に怒るわけにもいなくて、大翔は独り不平をこぼす。顔を上げると、美夢の姿は完全に視界から消えていた。

見失った彼女を捜すべく、彼は立ち上がる。

今いる場所の花畑は、どうやらなだらかな丘になっているらしい。取り敢えず、それを登ってみることにしてみる。歩くと、足許の葉

が足首を擦った。さわさわとした音が、耳の中に優しく流れ込んでくる。

その穏やかな空気の中で、大翔はゆっくり足を進めていった。視界が少しずつ上に広がり、丘が下に沈んでいく。ややあって丘の頂上にいきつくと、眼下に思いがけないものを認めた。

ついさっき想像した日本家屋が、丘の下に聳え^{そび}たっていたのだ。彼は息を呑んだ。

唐突に現れたその豪邸は、堂々とした風格をもって存在していた。黒い瓦屋根が、空から降り注ぐ光を強く反射している。庭には巨大な松の木が植えられ、白い敷地に長く伸びる影を落としていた。

大翔は今度は丘を降り、その屋敷に向かって歩いていく。辿り着いた屋敷は、丘の上で眺めていたときに想像していたよりもずっと巨大で、大翔を圧倒した。

仰々しい木製の門の前に立つと、門は音もなく開いた。

そして、白い地面と思っていた庭が、その全貌を現す。それは大ききの揃った小石が敷き詰められた和風の庭園だった。

枯山水。

そんな単語が頭に浮かぶ。

いつだったか、日本史の授業で習った気がする。確か、小石を水の流れに見立てていたものだった。

確かに、よくよく周囲を見渡してみれば、小石の庭には水面^{みなも}のような線が引かれている。松の木を取り囲むようにして、同心円状^{みなり}にしてあるのは、島を表現でもしているのだろうか。更に、石の水面^{みなも}の上には、花崗岩^{かこうがん}でできた道が漂っていた。

大翔は花崗岩の橋を渡り、豪邸前に立つ。外と中とを隔てる戸は、これまた大袈裟なまでに大きく、大翔自身の影をのっぺりと写していた。

戸は思っていたよりもずっと重かった。低く唸る戸を横に開き、中に入る。しんと、冷たい灰白色の三和土^{たたき}は、彼が知るとこの家の

玄関よりも広い。そして誰の靴も置いてなくて、人の気配というものがあるで感じられなかった。

「お邪魔しまーす」

大翔は小声で、律儀に挨拶をする。

玄関から続く廊下にもやはり人の気配はなくて、返ってくる声は当然、ない。

——でも、美夢はここにいるはずなんだ

何故か彼はそう確信していた。

この大きな屋敷のどこかに潜んでいて、自分を捜し回るこの頼りない男を窺って、楽しんでいるのだと。

くすくす、くすくす。

不可聴ふかちようの笑い声が、そこかしこから聞こえてくる。

——絶対、見つけてやるぞ

危ほしうく綻はらびそうになる口許を抑えて、大翔は意気込む。

その時、ふと、下駄箱の上に置かれている花瓶に気付いた。

焦げ茶の丸底の花瓶は、首は細くなっていて、頭に色とりどりの花を咲かせている。これは、外の花畑に生えていたのと同じ花だ。

そこにあるだけで仄かに漂う香と、淡い色彩が、優しい印象をこちらに与える。

大翔は、ふと、茜あかねのことを想った。

一見、実に猛々しくみえる茜にも、実は繊細な乙女心があるということを、大翔は長年の付き合いで知っている。台風が過ぎ去った朝に、その爆風に耐えられず命を落とした小鳥を拾って、彼女は泣いていた。一緒に墓を掘ってやった記憶がある。また、小学校の頃なんぞは、大翔が花壇を誤って踏んでしまったら、顔を真っ赤にして怒鳴っていたものだ。

——お花が可哀想でしょ！

気が弱い大翔は、ただひたすら謝るのみだったが、内心では腹立たしかった。けれど、今ならば彼女の気持ち分かるし、そんなところが微笑ましくそして愛しくも思える。

——持って帰ったら喜ぶかもしれないな

大翔はそっと花瓶に手を伸ばした。

しかし、手が触れた途端に花瓶は傾き、落下する。受け止める暇もなかった。

こん、と硬い音が響く。焦げ茶の花瓶から流れ出した水が、三和^{たた}土を濃く染めてすぐに水たまりを作った。

「あちゃー」

大翔は花瓶を拾い上げて、もとの場所に置く。そして辺りを探して、散ったはずの花を集めようとしたが、どこにもなかった。どうやら、見つかりにくいところに落ちてしまったらしい。

どうしようもないので、花のことは諦めて、大翔は靴を脱いだ。板張りの床は冷やりとしていて、靴下を履いていてもそれが伝わってくる。

「みーむー？」

その名を呼ばわってみるが、返事は、ない。

板が軋む音だけが屋敷の中を響いている。どれぐらい周囲を見渡していただろう、いい加減、心細くなった時だった。

「わっ！ えへへ」

突然、上から何かが降ってきて、大翔を羽交い締めにする。視界を埋め尽くすのは、雪の色ばかりで、それ以外は何も見えない。

「ちょ、放せよ。びっくりするじゃないか」

少し怒ってみせると、上から降ってきたものは、すぐに退いた^ど。

「大翔は私を見つけられなかったから、隠れ鬼は私の勝ちね」

美夢^{みむ}は漆黒の双眸に、邪気を孕ませて笑う。どうやら天井の梁に登って隠れていたらしい。そんなどこにいても、見つけれられるわけがない。

大翔はその憎らしい少女の顔を、思いきり睨み付けた。だが、彼女も負けじと睨み返す。そして、やがて二人は盛大に吹きだした。

一体、何がそんなに可笑しかったのか分からないが、目尻に涙が滲むほどに、ただ笑い転げていた。こんなに笑ったのは久しぶりだった。

笑いの発作がだいぶ治まった頃、大翔は気付く。美夢の着物が深い闇色に染め上げられていることに。想像していたものと寸分も違わず、美しい色を纏った少女がそこには存在していた。

そして大翔は理解する。ここは自分の世界なのだと。自分が考える通りに動き始める、穏やかで温かい世界なのだと。

「そうよ、ここはあなたの世界」

美夢は唄うように告げる。

彼女が心を読んだことに、既にさほどの驚きは感じなくなっていた。

「だから、あなたが私に、あなたの望む世界を教えて」

少女の可憐な両手が、大翔の頬を優しく包み込んだ。そのまま彼女の顔が近づく。そして鼻先に、ふわふわとした綿毛のような髪が掠った、その刹那のことだった。

がくん、と身体が大きく痙攣した。

頭の上から冷たい水を被ったときのように、鼓動が強くうち、そして大翔は現実に戻された。

我に返れば、大翔は硬い椅子の上に座っていた。

教室内の生徒達は変わらず、大翔と同じように、机と椅子にそれぞれ着いている。そして教壇には教師がいる。

いつもと同じ日常。退屈なぐらいに平凡な世界。

瞼を開ける前にいた春の日差しのような柔らかな世界との、その

ギャップに彼は軽い眩暈を覚えた。

夢を見ていたのだ。

大翔は、ほーっと長く溜息を吐く。

続き夢とはまた珍しい。今朝、またあの夢の世界に浸りたいと、あんなにも切に願ったせいかもしれない。

「つまり、等差数列というものはだなー」

教師が、授業なんてまるで聞いていない生徒達を前に、やる気のない説明をしていた。生徒らの方とはいえば、ペン回しをしてあらぬ方を見ていたり、俯うつむいて携帯でメールを打っていたり、机の中に隠した漫画を読んでいたりと、少し前の大翔のように微睡まじろんでいたっている。勿論、中には真面目にノートを取っている者もないではなかったが。

気怠けだるく、辟易へきえきするぐらいにつまらない日々――その中の一日。

大翔は、今度は短く息をつく。

何もかもがめんどくさくて、大儀に感じた。

「よし、少し早いのがきりがいいので、今日の授業はここらへんでやめておくか」

教師がそう言って教科書を閉じたので、大翔は大層、驚いた。一瞬、夢の中のあの少女のように自分の心を読んだのだろうか、と勘ぐったぐらいだった。

授業が始まったのは、ついさっきのことだ。それをもう終わらせるとは。確かに、生徒達の表情には覇気というのが全くなくて、早々に切り上げたくなる気持ちも分らないでもないが。もっとも、うたた寝をしていた自分が言える筋ではない。

大翔はそう思考を巡らせながら、時計を見た。そして自分の目を疑った。

五分かそこらぐらいしか進んでいないであろうと思っていた針は、しかし五十分ほど過ぎていたのだ。どうやらよっぽどぐっすりと寝入ってしまったらしい。今まで何度も、授業中に浅い眠りに落ちてしまったことはあるが、こんなにも爆睡してしまったことなど

ない。

愕然としている大翔をよそに、生徒らは休憩時間が僅かながらにも延びたことを喜んで、また悠々と自分達の時間を満喫し始めていた。

「どうしたんだい、ぼんやりして？」

笑い含みの声が聞こえてきて、大翔はそちらを振り返った。そこにいたのは一人の少年。その黒い髪はまるで銀粉を散らしたような艶があり、常に笑っているような鋭い細い目が特徴的だった。でも笑っているような目は、その奥に鋭敏な光を宿し、片方だけ吊り上げられた唇は邪気すら感じる。

「あ、いや……」

答えかけて、ふと大翔は誰だったかな、と考える。すると、少年の方はまるで大翔の心を読んだかのように返した。

「村正だよ」

「あ、そうだった、村正君。……なんか、ごめん」
すると、少年は笑った。

「いいって。何か疲れているみたいだね。大丈夫？」

心配の台詞とは裏腹に、語調にはどこか面白がる響きがあった。

「うん、大丈夫」

「そうか、それなら良かった。無理しないようにね」

少年はくつくつと笑いをかみ殺しながら、大翔の傍を去っていく。
大翔はそれをぼんやりと眺めていた。

——どうしたんだろ。僕、疲れてんのかな

大翔は一人伸びをして、涼汰りょうたの席に視線を滑らせる。

大翔が羨望し、そして妬むその少年はまだ帰ってきてはおらず、机と椅子は寂しく主あるじの帰りを待っていた。

窓から見ると晴れ渡って温かそうな外も、実際、出てみれば肌を突き刺すように寒い。日は照っているのに、そのささやかな光だけでは、吹き渡る木枯らしや冷たく漂う空気を和らげるに足りない。

^{あかね}茜はぶるりと身を震わせた。

なんとなく胃の辺りがむかむかして気持ち悪いような気がして、彼女はついさっきまで保健室のベッドで休ませてもらっていた。しかしふと目を覚ますと、茜よりもっと具合の悪そうな生徒が、ベッドの空気がなくて椅子に腰掛けていたのだ。

それで罪悪感を感じ、保健室を後にしたのである。けれども、体調が悪いと言って教室を出てきた手前、戻るのは躊躇^{ためら}われた。だからこうやって外に出ているわけだが……どうにも心地よく過ごすことはできそうにない。それほどまでの寒さだった。

「なんだかなあ……」

茜は誰にともなく呟く。

密かに気に入っている花壇の傍に、彼女は腰掛けた。

あと数週間もすれば、緑の芽が出るであろうその場所も、今はまだ固い黒土に覆われている。春の気配はまだその片鱗すら覗かせていない。

胃の不快感はまだ続いていた。

でも、吐き気がするというわけではなくて、我慢できないというわけでもない。そもそも本当に胃が悪いのか、自分でも判然としなかった。

この気持ち悪さは、朝、大翔^{ひろと}の近くを歩く少女を見てからのような気がする。

その少女は、長い髪を棚引かせ、まるで茜に見せつけるかのよう
に、彼の二、三步後ろを歩いていた。そう、茜は確かにそれを見た
はずだったのだけれど。

一瞬、目を放した隙にその少女は忽然と消えていたのだ。まるで、最初から何もなかったかのように。いや、事実、何もなかったのだろう。

——茜ちゃん、もう重症だね
脳内に涼汰の台詞が蘇る。

自分でも心からそう思った。そんな幻を見てしまうほど、大翔のことが気になって仕方ないなんて。

——あいつ鈍いから、はっきり言わないと伝わらないぞ
そんなことは分かっている。分かっているけれど、伝える勇氣なんて、ない。

そんなことをしてしまったら最後、『幼馴染み』という二人の近い関係が壊れてしまいそうな気がして。

茜は今まで『幼馴染み』という鎖でもって、自分の心が外に出ていけないように縛っていた。自分の立ち位置を守ること、誰よりも近く大翔の傍にいたのだ。

それなのに、今朝、あんな少女の幻視を認めてしまって——彼と隔てのない場所にいる存在があると思ってしまうて、だからこんなにも動揺しているのだ。

あれは見間違いだっただと、己の浅ましい心が見せた幻影だったのだと、そう自身に言い聞かせても、胸騒ぎはおさまりそうにな

い。
——何で、あたしがあんなへたれ男のせいで、こんなにやきもきしなきゃなんないのよ！

ここまでくると、大翔に対して理不尽な怒りさえこみ上げてくる。同世代の女の子ですら羨ましがするような卵肌と、おっとりとした優しい一重瞼の少年の顔が頭に浮かんできて、茜はまた、胃袋に砂を流し込まれたかのような心地に陥った。

冷たい風が吹いて、傷んだ髪を弄もてあそんでいく。短いスカートから伸びた素足が、もろに風を浴びて、寒さがそこから全身に這い上がってきた。

——こんなに頑張ってるのに、馬鹿みたい

茜は不意に自分が惨めになった。

大翔に少しでも可愛くみられたくて、精一杯お洒落しているつもりなのだ。

ファッション誌を読んで、流行の髪色を研究した。そして、お金がないから自分で染めた結果、斑むらができた上に髪はガサガサに傷んでしまった。結局、美容院に行つて特に損傷の激しかった毛先を刈つて、更に高いお金を出してストレートパーマをあて、毎朝、ワックスを塗りたくっているお陰で、見た目にはそれほど見窄みすぼらしくは見えない。けれども、手櫛で梳いてみると、ごわごわしていて、まるでトウモロコシの毛のようだった。

また、少しダイエットしてスカートも短くしてみた。しかし、こんな冬の日には寒くて仕方がないし、おまけに階段を歩くときはいつも下を気にしなければならぬ。そして肝心な大翔は目もくれなくて、こちらに関心を寄せてくれるのは痴漢ばかりだ。

何をやっても上手くいかない。全部自分の独りよがりすぎなののだ。

「あーあ！」

思い切り叫ぶと、背後の茂みが、がさがさと音を立てた。

茜は驚いて身を竦すくませる。ややあつてでてきたのは、馴染みのあの先輩だった。

「あーるえ？　茜ちゃんもさぼり？」

硬質な髪に、やや吊り目がちの双眸。本人は自分のことを「老けている」といつも苦笑いをするのだが、同年代よりは大人びて見える容姿は勇ましく、頼りがいのあるような印象を相手に抱かせる。

「水本先輩……」

茜あかねはまじまじと、突然現れたその少年を見つめた。一方、涼汰りょうたは飄々とした口調で茜に軽く挨拶をし、そして当然のように彼女の隣に座り込む。手には缶コーヒーを握っていた。

茜は思わず顔を顰しかめる。

茜はコーヒーが嫌いだ。全然綺麗な色じゃないし、何よりも苦くて不味い。もうその匂いを嗅いだけでも、気分が悪くなるくらいなのだ。

しかし、涼汰はそれを手にしている。しかも、ブラックだった。よくもそんな苦い以外の何でもないものを飲めるというものだ。砂糖やミルクが入っていたら、また話は違ってくるかもしれないけれど。

ついついその不快な香を撒き散らすそれを睨んでいると、涼汰が口を開いた。

「何？ 茜ちゃん、これ欲しいの？ あげようか？」

「いや、そんなんじゃないです！」

慌てて否定する。彼は大きな口を開けて呵々と笑った。

「知ってるよ、苦手なんだろ、コーヒー。からかってみただけ」

一つ年上の先輩はそう言い置いて、コーヒーを茜と反対側に置く。そのさりげない気遣いが、嬉しくて……そして少しだけ悲しかった。

「水本先輩、何やってるんですか。今、授業中でしょ」

後ろめたい思いを押し隠そうと、茜は敢えて強い響きで言ってみる。すると涼汰は平然と返した。

「ん、俺はいつものこと。それより茜ちゃんこそ何やってんだよ」

「あたしは……」

「今日の出勤先は保健室じゃないんだな」

何でもないことのように、さらりと言われて、茜はぎくりと身を竦ませた。

そして目で涼汰の様子を窺う。

二人の間に落ちた沈黙は、たった一瞬だったのだけれど、茜にはそれがとても長いように感じた。

その一瞬の後、茜は根負けしたように口を開いた。

「知ってたんですね」

「まーね。俺もよく授業出ないで、ふらふら歩いてるから」

「それはそれでどうなんですか」

茜が突っ込んで、そして二人で少しだけ笑った。共犯者のような気安さがお互いにあった。

茜はこのところ、まともに授業に出ていない。でも、特にどこかが悪いというわけではなかった。ただ、何となくかったるいのだ。全部が。

そう感じ始めたのはいつからだっただろう。

気が付いたら、そうになっていた。そして周囲の皆の言動を、白々しく思うようになっていた。

友達はいないわけではない。

特に茜は、可愛いものや流行のファッションを取り入れるのが得意だったから――それは勿論、大翔の目^{ひろと}を少しでも自分に向けさせようとする研究の賜であるわけだが――、とりわけ、女の子たちが寄ってきた。

――茜のそのバッグ可愛いね。どこのブランド？

――メイクの仕方教えてよ

――茜はいつも綺麗にしてるよね

――いいなあ、私なんて茜みたいになるなんて無理無理

彼女たちは一様にそう言った。

そしてそれをロボットみたいだと思った。

彼女たちはいつも茜を褒める。主に茜の外見を。

着崩してある制服を、毎朝一時間もかけている化粧を、素敵だという。

まるでそれ以外には、茜の意義はないとでもいうように。

最初はもてはやされるのが嬉しかった。尋ねられれば、時間をかけて色んなファッションを教えた。

でもある日、幾ら教えても、彼女たちが自分の真似をしないということを悟ってしまった。同時に、彼女たちはそんなに熱心に、茜の話を書きたいわけでもないことが分かった。

それから芋蔓式に見たくないものが、色々と見えてしまったのだ。茜が話しはじめると、女の子達が目配せをしているような気がした。いや、それは目配せといえるほどの大袈裟なものではない。けれども、彼女たちの中に、暗黙の了解として流れるものを敏感に感じ取ってしまった。

——また、自慢話が始まったよ。取り敢えず話し合わせておこうそんな声なき会話を聞いたような気がした。

けれど彼女たちはそれを明言しない。みんな似たような優しそうな笑顔で頷きながら、話を聞いてくれるのだ。

急に虚しくなった。

そして、周囲の人間関係が全部上辺だけのものだと思うようになった。

クラスでは親友とみなされているあの子とあの子は、お互いが独りぼっちになりたくないからくっついていただけ。

クラスで人気のあるあの子は、みんな仲間はずれにされたくないから、傍に寄っていくだけ。

そして、自分の周囲に寄ってくるあの子たちは、『友達』というものを失いたくないから、悪い空気になるのが嫌だから、仲良くしてくれているだけ。

いつの日からか、気付いてしまった。

友達に恵まれているはずの茜は、しかし表の現象とは裏腹に、孤独を強く感じるようになった。そして、いつの間にか、クラスに足を運ぶことすら少なくなってしまったのだ。

——あたしは誰なの？ あたしはどこにいたらいいの？
崩壊したアイデンティティーが、彼女をそうさせていた。

木枯らしが吹いた。砂が巻きあがり、茜あかねの足を浅く搔く。肌の熱がまた奪われた。指先の感覚はもう麻痺していた。

「茜ちゃん、最近機嫌悪いよね。大丈夫？」
涼汰りょうたが問う。

でも、茜は答えなかった。それは大翔ひろとにこそ聞いて欲しいことだった。

彼は更に言を継いだ。

「あ、分かったぞ。大翔と喧嘩したんだろ。だからふて腐れてんだ」
涼汰が言い終わるか終わらないかのうちに、茜は勢いよく立ち上がる。そして、彼をきつい眼差しで見据えた。

「だ、か、ら！ 何でそういうことになるんですか、何で！ 違います！ 第一、ヒーロと朝、一緒に登校してたじゃないですか」

「ごめん、冗談、冗談だって。そんなムキになって怒るなよ」
涼汰は苦笑いをした。

茜は鼻白かなみんだまま、またその場に腰を降ろす。

「で、鹿波茜かなみさんは、どうしてさぼってるんですか？ 何か嫌なことでもありましたか？」

涼汰は後輩の口調を真似して問うた。だが、その抑揚のない響きの中に、逆に茜は自分に対する優しさを敏感に感じ取ってしまい、辛かった。

茜は知っている。自分に甘すぎる涼汰のことを。

そして、自分がどれだけ狡ずるい人間であるかも知っている。卑怯で我が儘で自己中心的な己を自認している。

それでもなお、そうであることを、やめられない。
どうしても頼ってしまうのだ。独りでは埋められない寂しさを。
そして茜はそんな自分が大嫌いだった。

「別に嫌なことなんてないですけど、ただ無気力になっちゃっただ

けです」

「そっか」

涼汰はこういうとき、あれやこれや突っ込んで聞いてきたりはしない。しかし、冷たくはねつけるようなこともしない。ただ、だまって傍にいてくれるだけなのだ。

それがとても心地よく、そして同時に良心の呵責が一層、募るところにもなる。

風に乗って、コーヒーの苦い匂いが、漂ってきた。少し距離を離してくれたぐらいでは、やはり匂いは誤魔化されそうにない。

「あたし、次の授業出ます」

茜は、再び立ち上がった。

嘘だ。ただ、居場所を変えるつもりなだけだ。

茜は自分の弱さを痛感していた。

「あ、そう。……少しは気分晴れた？」

何の疑いもせずに、歯を見せてくる笑顔が目には痛かった。

「はい、まあ」

「俺も次は出よっかな。コーヒー飲んで、目え覚めたし」

涼汰は大きく伸びをする。

二人で見上げた空は、どこまでも遠くて、茜は自分たちがとてもちっぽけな存在のような気がした。

その時、掌にかそけき感^{てのひら}触を覚えて、彼女はそちらに視線を落とす。続いて大きな目を更に大きく見開いた。

茜の白い手の中には、桃色の花卉を開かせた小さな花が散っていた。

「どこから、きたんだろう……」

呟くと、隣にいる少年が「ん？」と首を傾げる。

けれど、茜はそれに答える余裕を持たなかった。

まるで誰かが放り投げたかのように、赤や黄の花々が上から降ってきたのだ。けれど、量は決して多くはなく、小ぶりの花束をばらにした感じだった。

足許の花壇は、まだまだしんと冷え切っていて、寂れている。春ならばいざ知らず、花がここに散るはずがない。いや、たとえば今が春だったとしても、上から落ちてくるなど、あり得ないことだ。

冷たい北風が吹いた。

だが、茜はその凍てつくような寒さも忘れて、しばし茫然と佇ん
たたずでいた。

窓の外からは鳥の鳴き声がし始め、閉じられたカーテンの隙間から光が差し込み、朝の訪れを告げる。

普段であれば、とくに起きていなければならない時間だったけれど、大翔はまだベッド上の自分の布団の中だった。

身体がベッドに縫い止められている。それほどまでの怠さが、大翔を支配していた。

彼はもぞもぞと動いて、布団を自分の身体に巻き付けるようにしながら、そのままその中に更に深く潜り込んだ。

一体、どうしたというのだろう。

ここ数日、妙な倦怠感に付きまとわれていたが、今日は殊に酷い。身体を起こす、という簡単な動作ですら、既に億劫だ。四肢の末端から、疲労がどんどん滲み出ていつている。けれども、それは、出ていっても出ていっても、一向に減ってくれそうもない。むしろ出ていくのが自分で分かれば分かるほど、内に蓄積されていた疲労の存在を自覚してしまい、ますます、起きあがるのが嫌になる。

——昨日は早めに寝たのに

眠ったという気が全くしない。いや、違う。眠りがあまりにも心地よすぎるのだ。心地よすぎるから、目覚めた時の現実世界の、心身の重さに耐えられなくなってしまう。

大翔はこのところ、同じ夢をずっと続けて見ていた。淡い色彩の花畑と、一人の美しい少女がいる夢を。

その夢で何をしているのかは、はっきりとは覚えていない。覚えてはいないけれど、多分、何もしてはいないんだろうと思う。その世界では安穩とした時間だけが過ぎていき、きつと大翔はそれを貪っているのだ。そんな印象だけが心の中に残っている。

そしてその夢から帰ってくる度に、倦怠感が蓄積されていく。その倦怠感から逃げたいから、また眠る。そして起きると、寝る前よ

り悪化している。悪循環だった。

「大翔、もう朝よ。いい加減、起きなさい」

母親が部屋の扉をノックする。

大翔だって本当は起きたい。けれど、起きあがることが……できない。

体中に重しを乗せられたかのような感覚の中、できるだけ力を掻き集めて、大翔は扉を隔てた向こう側に聞こえる声を出した。

「ちょっと今日はきついんだ。風邪ひいたみたい」

「あら、それは大変。後で薬持ってきてあげるから、寝ておきなさい。学校には連絡しておくから」

「うん、ごめん。ありがとう、母さん」

足音が遠退いていくのを確認して、大翔は力を抜いた。声を出したせいで、また疲弊してしまった。もう、何か言葉を発するのでさえ、苦しい。

この辛さを解消する方法は一つしかない。また、眠ることだ。

大翔は寝返りをうった。横腹が柔らかい布団の上に沈んでいく。

そうだ、いつも自分は頑張っている。きつくてしょうがない日、その一日だけ休んで何が悪い？ どうせ、学校に行ったところで、何があるというわけでもない。変化に乏しい日常が転がっているだけだ。

進んでいるのかいないのか分からない日常。大翔がいてもいなくても同じところ。

溶け込んでいくのが難しい場所。生きていくことに、膨大なエネルギーが必要な世界。

今はそのエネルギーが枯渇しているのだから、充電するために、少しぐらい休んでも大丈夫だろう。

そう決意すると、不思議なほど心と体は軽くなっていった。

大翔は、ずれた枕の位置をなおす。枕が耳に優しい、しゃらしやらとした音を奏でた。大翔はしばし、その音に酔う。優しい眠りの世界へ誘うその音は、荒れていた彼の心を落ち着かせた。

その音を聞きたくて、何度か枕を弄^{いじ}っていた大翔は、しかし異変に気付いた。

枕から発せられているはずのその音が、高く澄んだものに変じたような気がしたからだ。それを確かめたくて、また数回枕を叩くと、音は次第に繊細で可憐な音色に変わっていった。

——しゃら　しゃら　しゃらん

鈴だ。誰かが鈴を振って、走っているのだ。

大翔はそう思った。やがて、枕を叩かずとも音は響くようになる。かつ、細かく震える音は、少しずつこちらに近づいてくるようだった。

——しゃりん　しゃりん　しゃりん

気付けば周囲は、白の空間。そしていつの間にか、大翔は切り株の椅子に腰掛けていた。

椅子の上に指を走らせると、幾重にも円を描く年輪が盛り上がっていて、そこに触れた。

こんな椅子が唐突に出現するあたり——そして大翔がそれを何も妙に思わずに、座っているあたり——、きっとあの世界の扉が開かれるのが近い。

——ちりん　ちりん　ちりん

——ちりん　ちりん　ちりん

彼の弾む心に同調するように、鈴の音は強くなっていった。

——りん　りん　りん

来た。

大翔は微笑む。目の前には、漆黒の着物を纏^{まと}い、純白の髪を持つ少女が立っていた。

想像した通り、美夢^{みむ}の細い腕には小さな鈴を連ねた腕輪^{はま}が嵌^はり込んでいた。

——大翔^{ひろと}、遊ば

少女は柔らかに声を響かせる。ふっくらとした唇が愛らしかった。

——うん

大翔が頷くと、美夢は心底嬉しそうに、顔を綻^{ほころ}ばせた。そして大翔にも、同じような鈴の腕輪をつけた。

＊ ＊

まだ目覚めたばかりの教室は、冷気に満ちていた。寒さのために、中にいる生徒達がそこかしこで震えている。吐く息が白く染まるほどではないにしろ、冷たい圧迫感さえ覚えるぐらいだった。暗く凍える夜を過ごした教室は、これからゆっくり時間をかけて、人の体温でまた温められていくのだ。

冷氣の中にチャイムの音が鳴り響き、一日の始まりを告げる。

それから少し遅れて、戸を開け、数名の生徒が大慌てで滑り込んできた。

「間に合ったー」

ところが、束の間の安堵を感じている彼等は、すぐに落胆する羽目になる。荒く息を吐く彼等の背後から、大きな人影が姿を現したのだ。その人影の正体である担任教師は、生徒らの頭を順番に小突いていった。

「間に合っていない、遅刻だ馬鹿もん」

どっと笑い声が沸き起こる。

朝から説教を始める担任教師と、彼を恨めしそうに上目遣いで見る生徒。そしてそれを、愉快そうに眺めている他の生徒達。

しかし、その輪の中に加わらない者が一人いた。

――あれ、大翔の奴、まだ来てねーな

涼汰は、窓際にある空っぽの席に気を取られていた。

大翔と茜、そして涼汰の三人は、何も毎朝、示し合わせて登校しているわけではない。ただ、三人とも通学の道筋と家を出る時間との関係で、途中で会うのだ。

そういうわけだから、三人のうちの誰かが寝坊した、或いは気紛れで早めに登校したりした場合は、当然のことながら会わない。故に、誰か一人欠けていたところで、特に不思議にも思わないのが常だ。

そして今日、涼汰は大翔に会わなかった。ここ数日、やけに眠そうにしていたから寝坊したかな、と思いながら登校した。それから今に至るわけだが、大翔は本当に寝過ごしてしまったのか、まだ教室内に入ってきてはいない。

「……と……、水本、いないのか！」

涼汰は、出席を取っている担任の大声に気付いて、反射的に声をあげた。

「あ、はいはい！ いますいます」

「まったく、危うく欠席つけるところだったぞ。ま、頭はいつもお留守のようだが」

再び教室内に、笑いの漣が立つ。涼汰は舌打ちしそうになるのを、すんでのところで堪えた。代わりに、陽気な調子で返す。

「それもそうですね。……先生は、頭の上の方がお留守なようですが」

笑い声が一段と大きくなった。

担任は一瞬ぼかんとし、何を言われたのか理解すると、怒りに顔を赤らめる。

「お、お前！ 言っていないことと、悪いことがあるだろうが！」

そろそろ禿が目立ちはじめた中年の担任は、持っていた画板で涼汰の頭を思い切り叩いた。

クラスメイトらは、もう限界と言わんばかりに、大爆笑していた。対して、担任の方は憤慨しながらも、生徒らを諫めることはせずに教壇に戻っていく。

その一連の流れを、涼汰はどこか遠くで眺めていた。

他人の欠点を嗤うことで、優位に立とうとする生徒達。

不快に感じているだろうに、生徒達に嫌われることを恐れて、一喝すらない担任。

彼等のその精神の、なんと卑しく懦弱なことか。

涼汰は胸内では彼等を軽蔑していた。けれども、それを表に出すことは決してしない。

——一番最低な人間は、俺なのかもしれないな

涼汰は自分を嗤った。

本音では蔑みながらも、それを隠して周囲に適当に合わせる……それが自分という人間なのだ。

求められれば道化のように戯けてみせる。必要とあれば、蝙蝠のように誰にでもへらへらと媚びてみせる。心の中では馬鹿馬鹿しいと感じているにも関わらず。

涼汰はそんな自分がとても嫌だった。そして。

涼汰は大翔が羨ましかった。

周りに自然に溶け込み、素直な気持ちのままで世界に接することができる彼が。そしてそれは、涼汰が持っていない純粹さだった。

茜が大翔に惹かれるのも無理はない。大翔は決して曲がったことはしない。どんなアホらしいことであっても誠実に取り組む。そして、自分を不必要に偽ったり、飾り立てたりもしない。ありのままの自分で、ありのままに生きている。

大翔の身に纏う雰囲気はとても澄んでいて、自然と人はそれに引き寄せられる。彼の癒しの空気は、誰をも安心させるものだった。

涼汰は、制服の肩に散った塵にふと目がついて、それを手で払う。朝の光を細かく反射しながら、塵は舞った。

「欠席者は、坂田一名っ」と

担任が名簿をチェックしながら言う。すると、クラスメイトの一人が口を開いた。

「坂田君、どうしたんですか？」

質問をしたのは、クラス内でも比較的、真面目な部類に入る女生徒だった。眼鏡の奥で、いつもおどおどと相手を見るような子だ。そんな内気な彼女が、こうやって自ら発言するのは珍しい。

「んー、坂田は体調が悪いらしい。さっき、連絡があった」

それを聞くと、女生徒は目に見えて落ち込んだ。

そういえば、他人と関わるのが不器用そうな彼女に、大翔が親しく話しかけていたのを思い出す。

なるほど、そういうことか。全く、どいつもこいつも忌々しい。二つ結びの髪を元氣なく垂らして、女生徒は俯いた。それを横目に、涼汰は奥歯を噛む。自分でも不合理だと思う怒りが、彼の胸の奥に渦巻いていた。

しかし、分かってはいるのだ。大翔や大翔に惹きつけられる者達に、苛立ちの刃を向けるのは間違っている、と。悪いのは自分なのだ。道化や蝙蝠であることに縛られてでしか、世の中を渡っていないこの自分。

不意に、前の席の奴が振り返って、プリントの束を回してきた。どうやら何か連絡事項があるらしい。涼汰もその中から一枚受け取って、残りを後ろの席に回す。

大翔の席には既に、誰かがプリントを置いていた。他に何もない机の上で、ただ一枚広がる紙が物寂しい。

にしても、自分ならいざ知らず、あの真面目な少年が休むとは希なこともあるものだ、と涼汰は意外に思う。

恐らく、よっぽど具合が悪いのだろう。

——見舞いにでもいつてやるか

気付けば教壇からは担任が消えていて、周囲の生徒らは一時限目の授業の準備を始めていた。涼汰も気怠げにそれに倣う。

教室内はまだまだ寒く、それは涼汰の心の奥までも冷やしていくようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1760y/>

縛——BAKU——

2011年11月14日03時28分発行